

入江泰吉の万葉写真のすばらしさは、入江がファインダーの中に単なる風景ではなく、万葉びとのところを見ようとしたからであろう。

入江の撮った大和路の風景写真は、ひときわ昔まえにはどこにでも見られた田舎の風景である。しかし、そこには万葉の時代を生き、そこで歌を詠んだ人たちのこころが宿っている。

それぞれの土地の風物は、現象的に目の前に見える存在を超えて、その土地の重ねてきた歴史を含み持つ。中世の歌学者たちが「花には吉野、紅葉には龍田」といつたのは、単に吉野の桜や龍田の紅葉が美しいからだけではない。吉野や龍田の地を重層的に彩る歴史文化とともに桜・紅葉を愛でたのである。

同様に入江はファインダーの中に映る風物に万葉びとのところと歌を見ようとした。しかし、それは容易ではなかつたと思われる。万葉びとと入江との間には千数百年の時の隔たりがある。その隔たりを埋めるために、入江はひたすらに待つたのである。

時は過ぎ去つて永遠に戻らぬものであり、かつ絶えず循環するものもある。

その循環する一瞬の時を万葉びとと同じところで捉るために待つたのである。そのための、努力を怠ることはなかつた。入江は、万葉集を学ぶことによりそこに生きた人の生活を知り、「かれらの真情をうかがいながらいわばフィルターにかけながら、自然をもう一度ながめ直してみることが重要であると述べている。その撮る側のフィルターは、自らに厳しく学ぶ精神の豊かさを反映する。

例え、「薄雪の大原の里」を撮した一枚の写真は、そこが大原であるという点を除けば、どこにでもある田舎の雪景色である。しかし、そこはかつて天武天皇と藤原夫人（五百重娘）が、睦まじく我が里に 大雪降れり

大原の 古りにし里に 降らまくは後
(2・103 天武天皇)

我が岡の 霽に言ひて 降らしめし
雪の碎けし そこに散りけむ

(2・104 藤原夫人)

という贈答を交わした地である。何気なく撮し込まれた二つの藁ぐろは、雪の中で寄り添い、二人の思いを象徴している。ここに入江のフィルターが活きているのである。

(高岡市万葉記念館館長)
(奈良女子大学名誉教授)



薄雪の大原の里 写真／入江泰吉

展覽會紹介
Exhibition
Introduction

万葉集・ここころの旅展

大和路を愛した入江泰吉の作品とともに

平成26年
12月5日(金)

平成27年
2月8日(日)
企画展示室

観覧料500円

※12/27(土)～1/1(木)は
年末年始のため休館



撮影：斎藤康一

わが国最古の歌集『万葉集』は全20巻からなり、4500首あまりの歌が収められ、わが国を代表する古典として、およそ1300年前の文化や生活、当時の人々のさまざまな心情を今に伝えています。そこからは、四季折々の自然と共生してきた人々のありのままの姿を感じ取ることができます。

写真家・入江泰吉は、大和路の風景や余情に魅了され、ライフワークとして約半世紀にわたり奈良大和路を撮りつづけてきました。

彼は、万葉の時代から息づく大和路の余情を、時間と空間を越えて一枚の写真の中に甦らせようという、およそ不可能ともいえる難解な作業に挑戦しました。被写体の奥に秘められた精神的な美を捉えようと模索を続けた結果、大和路特有の落ち着いた色調と情感豊かな表現によって「万葉のこころ」をみごとに現在によみがえらせました。

この展覧会では、明日香宮・藤原京・平城京・吉野離宮を都とした歴史的背景とも照らし合わせながら、万葉集の歌に漂う日本人の「心の原風景」を、大和路の風物を通して、万葉集の世界に思いを馳せていただければ幸いです。

プロローグ

・入江泰吉と 入江泰吉記念奈良市写真美術館

万葉の時代に都として栄えた地・奈良。

そこには、今も神代の頃より栄えた歴史、文化、そしてその時代を生きた人々の息吹が感じられます。1905(明治38)年奈良市に生まれた入江泰吉は、奈良・大和の地を愛し、半世紀近く撮り続けました。

まずはロビーにて、入江泰吉と入江泰吉記念奈良市写真美術館について紹介します。

展示室内

・万葉集・四つの宮

当時は、天皇が政治についての権力を持っていたため、度々起きる争いに巻き込まれ、亡くなつた天皇や皇子も数多くいました。そのため、新しい天皇は穢れを祓う意味も込め、別の地に新しい宮を造営しました。

わざか16年間という期間の中で詠まれた歌より、藤原京・香具山・畝傍山・耳成山(大和三山)を詠んだ歌、自然に心情を重ねた歌などを紹介します。

〈藤原京〉

藤原京は、694年奈良県橿原市を中心とした都でした。中国・唐の制度を模した「坊制」によって、大路・小路は碁盤の目のように分けられ、日本で最初の本格的な都城として誕生しました。

明日香川に心情を重ねて詠んだ歌や、代表的な歌人・柿本人麻呂の歌などを紹介します。

入江泰吉の著書や愛用の品をまじえて、その生涯と作品の魅力に迫ります。さらに、入江泰吉の全作品を収蔵する西日本初の写真専門美術館・「入江泰吉記念奈良市写真美術館」についても紹介します。

・万葉集の基礎知識

『万葉集』により親しんでいただけます。『万葉集』に関する基礎知識の一端を紹介します。あわせて万葉のふるさと・奈良大和路の魅力を映像や地図等でお楽しみください。

・万葉歌ベスト10

万葉集の中でも人気のある歌・10首を紹介します。教科書に掲載された歌や一度は耳にした歌など、私たちの身近にある万葉集の歌・心に残る万葉集の歌をお楽しみください。

〈明日香宮〉

明日香宮は奈良県・明日香村とその周辺の飛鳥時代の都であったところをいいます。壬申の乱で勝利した大海人皇子は、飛鳥淨御原宮で即位の儀を行い、天武天皇となります。藤原京へ遷都するまでの21年間、天武・持統天皇の二代にわたって治められました。藤原京に遷つた後は、明日香宮は万葉びとにとつては、変わることのない「心のふるさと」だつたと思われます。

明日香川に心情を重ねて詠んだ歌や、代表的な歌人・柿本人麻呂の歌などを紹介します。

会 覧 展

紹 介
Exhibition

万葉集・ここころの旅展

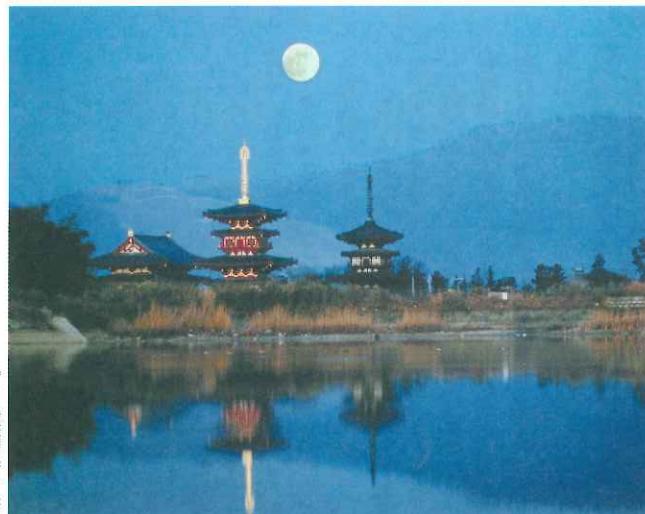
大和路を愛した入江泰吉の作品とともに

平成26年
12月5日(金)▼
平成27年
2月8日(日)
企画展示室
観覧料500円※12/27(土)～1/1(木)は
年末年始のため休館**■展示解説**

展覧会担当者による展示解説です。

会期中
毎週土曜日
午後1時半～
(約20分程度)参加費: **要当日観覧券**
申込: 不要。
直接会場にお越し下さい。

宵月薬師寺伽藍



710年、元明天皇は藤原京から約27km離れた平城の地に都を遷しました。平城京は現在の奈良市から大和郡山市にまたがる大都市で「あをによし 奈良の都は」との歌にも見えますように華やかな天平文化が最盛期を迎え、平城宮や貴族の邸宅、寺院などが建ち並ぶさまは、さぞかし壯麗であったと思われます。ここでは、防人の歌や恋の歌をはじめ、旧宮を歌った歌や四季の美しさを歌った歌などを紹介します。

（平城京）

710年、元明天皇は藤原京から約27km離れた平城の地に都を遷しました。平城京は現在の奈良市から大和郡山市にまたがる大都市で「あをによし 奈良の都は」との歌にも見えますように華やかな天平文化が最盛期を迎え、平城宮や貴族の邸宅、寺院などが建ち並ぶさまは、さぞかし壯麗であったと思われます。ここでは、防人の歌や恋の歌をはじめ、旧宮を歌った歌や四季の美しさを歌った歌などを紹介します。

（吉野離宮）

吉野離宮は、宮滝の風景を愛した舒明天皇により造営されたとされています。齊明天皇が水の祭祀を行い、持統天皇が幾度も御幸に訪れた宮もあります。「水の吉野」を歌った歌が多く存在する中から、吉野の川の美しさを感じられる歌や、宮廷に仕えた歌人・山部赤人の歌などを紹介します。

・万葉集・四季の植物

入江泰吉は、万葉集を学ぶことで古代の人々と花との深い関わりを知り、その美しさを再発見して、「花は究極の美」と考えるようになり、以降晩年まで万葉の花を撮り続けました。このコーナーでは、万葉の時代から人々に愛された植物より、梅・紫草・萩・椿など現在私たちの身近で見られる植物が折り込まれた歌を、四季別に紹介します。

大和路の写真をはじめ、仏像や文楽、奈良の行事写真などで知られる入江泰吉の作品より、万葉集にスポットを当て、紹介する展覧会です。四季折々の鮮やかな大和の風景を、万葉集の歌とともにお楽しみください。

(学芸課／野々村昭美)

◆関連企画のご案内◆**■特別講座「大伯皇女の歌と入江泰吉」※要申し込み**

万葉集の研究をされている坂本信幸氏(高岡市万葉歴史館館長、奈良女子大学名誉教授)による、万葉集の講義です。

- 日 時: 12月21日(日) 午後2時～3時30分
- 場 所: 高知県立文学館 1階ホール
- 参加費: **要当日観覧券**
- 申 込: 電話または文学館受付にて事前申し込み。(定員100名)

■企画展関連トーク「入江泰吉の写真家人生～大和に魅せられて～」

入江泰吉記念奈良市写真美術館・木村真士氏による関連トークです。※要申し込み

- 日 時: 平成27年1月18日(日) 午後2時～3時30分
- 場 所: 高知県立文学館 1階ホール
- 参加費: **要当日観覧券**
- 申 込: 電話または文学館受付にて事前申し込み。(定員100名)

■記念講演会「入江泰吉と万葉集」※要申し込み

大阪府立大学教授・村田右富実氏による記念講演会です。

- 日 時: 平成27年1月31日(土) 午後2時～3時30分
- 場 所: 高知県立文学館 1階ホール
- 参加費: **要当日観覧券**
- 申 込: 電話または文学館受付にて事前申し込み。(定員100名)

**■朗読の会「入江泰吉の作品を読む(仮)」**

文学館朗読サポーターの皆さんによる、入江泰吉のエッセイ「大和しうるわし」などの朗読です。

- 日 時: 12月20日(土) 午後2時～
- 場 所: 高知県立文学館 1階ホール
- 参加費: 無料
- 申 込: 不要(当日、直接会場までお越しください)

常設展 虫がね

4回シリーズで、
変わる常設展示をご紹介！

高知県立文学館では、いつも新しい発見、新しい体験をしていただけるよう、展示入替を行っています。今年度は「反骨の大衆文学」コーナー・浜本浩、「現代の作家」コーナー・上林暁と安岡章太郎、「近現代の詩歌」コーナー・橋田東声を新たに展示しております。

展示作家紹介② 橋田東声

橋田東声は、1886(明治19)年、高知県幡多郡中筋村有岡(現・四万十市)生まれの歌人。尋常小学校を卒業後、一年間農耕や子守などの家事を手伝い、学業から離れます。父を説得し上級の学校へと進学します。

1906(明治39)年、鹿児島の第七高等学校造士館に入学。在学中、級友らと歌会を持ち、「明星」社友となつて短歌を投稿しています。とはいっても、書家時代の東声は短歌より小説を好み、文章の投書に熱心で、東京帝国大学入学後は作歌から遠ざかり、「ホトトギス」や「アララギ」といった雑誌に小説を発表しています。

作歌と疎遠になつていた東声に転機が訪れたのは、東京日日新聞社入社の翌年、1915(大正4)年。有楽町を歩行中に突然咯血卒倒。病に臥しましたが、病床で斎藤茂吉の歌集『赤光』を読み、再び作歌を志します。東声は、「斎藤茂吉氏の『赤光』が世にいらず、又私が半歳の久しき病床に呻吟する」とがなかつたならば、私は一生歌をつくらずに終つたかも知れない」と述べています(『静夜歌話』所収「私の投書家時代」より)。

1919(大正8)年、臼井大翼と雑誌「霸王樹」を創刊。1921(大正10)年には、生前唯一の歌集『地懷』を刊行します。また、評論集『自然と韻律』や、『土の人長塚節』『子規と節と左千夫』

など、敬愛する人々に関する本も執筆しています。東声は、『地懷』刊行までの数年間に次々と肉親を失い、同書刊行の翌年には妻志保子と離別するなど、不幸にも見舞われましたが、閑雅で清澄な名歌をのこし、1930(昭和5)年12月、その生涯を閉じました。なお、臼井と始めた歌誌「霸王樹」はその後も刊行を続け、創刊から90年以上経つた現在、通巻1000号を越えています。

今回の展示では、東声の文学活動の歩みをコンパクトに紹介。初版本や、中学時代の漢文筆記ノート、草稿、晩年の短冊といった貴重な資料を展示しています。

橋田東声は、刊行までの数年間に次々と肉親を失い、同書刊行の翌年には妻志保子と離別するなど、不幸にも見舞われましたが、閑雅で清澄な名歌をのこし、1930(昭和5)年12月、その生涯を閉じました。なお、臼井と始めた歌誌「霸王樹」はその後も刊行を続け、創刊から90年以上経つた現在、通巻1000号を越えています。

高知県立文学館では、「第17回児童生徒文学作品朗読コンクール地区審査」を県内三箇所にて行いました。東部会場は8月15日(金)田野町ふれあいホールにて、西部会場は8月18日(月)大方あかつき館にて、高知会場は8月21日(木)文学館1階ホールにて行いました。8月に入つて荒天続きの高知県内でしたが、申込者全員が無事に審査に参加することができました。今年は41校114名の皆さんに参加して下さり、そのうち地区審査を通過した約20名が11月に開催される県審査に進みます。

県審査での特別審査員には、村岡恵理先生をお招きいたします。『アンのゆりかご』・村岡花子の生涯』で、祖母である村岡花子さんの業績を紹介され、NHK連続テレビ小説「花子とアン」の原案となつたことで話題となりました。

村岡恵理先生は花子さんの著作物や蔵書、資料を「赤毛のアン記念館・村岡花子文庫」として保存、研究、公開し、お姉様の美枝さんと同館の主宰を務められておられます。全国各地での講演を通して、日本の子どもたちに『赤毛のアン』を紹介した花子さんの業績を紹介するとともに、カナダ、プリンスエドワード島州政府と交流を続け、日本とカナダの友好関係促進につとめておられます。記念講演会では、「アンのゆりかご・村岡花子の生涯」と題しまして、出場者の皆さんに素敵なお話しを聞かせて下さることと



▲橋田東声コーナーの展示風景

平成26年度第17回児童生徒文学作品朗読コンクール地区審査報告



最後になりますが、夏休みの間、一生懸命練習に取り組んでくれた児童、生徒の皆さん、保護者の皆さま、先生方のおかげで無事に地区審査を終えることができました。厚く御礼を申し上げます。

(学芸課／谷岡真衣)



▲高知会場地区審査(第3グループ)の様子

◆県審査(公開)

表彰式・記念講演会があります。

**会場:高知県立
文学館ホール**
**日時:11月2日(日)
午後1時~**

お問い合わせは
朗読コンクール担当まで
(TEL: 088-822-0231)

土佐につながる啄木父子の歌碑 — 高知駅前の文学碑 —

啄木の父 石川一禎終焉の地

▲高知駅前にある啄木・一禎父子の歌碑

高知駅前の東側緑地に石川啄木とその父一禎の歌をきざんだ歌碑が建つたのは、5年前の2009年9月だった。高さ140センチ、幅185センチの県内産緑色自然石が使われた。なぜ東北岩手出身の啄木とその父一禎の歌碑が、南国の高知駅前に建っているのか。奇異に思う人も多かつたようだ。

啄木は「握の砂」や「呼子と口笛」などの歌集と詩集で、また「時代閉塞の現状」などの評論で、幸徳秋水らの大逆事件をつくりあげていく「冬の時代」にいどみながら、明治末年、27歳で病没した。故郷浜民村を追われ北海道、東京を流浪しながら多くの青年の心に刻む文学を残した。だが啄木一家は離散、父の一禎も浜民村を追われ、晩年は姉の夫山本千三郎の元に身を寄せた。

その千三郎は鉄道局官吏で1925年高知へ神戸鉄道局高知出張所長として赴任、土讃線開通にたずさわった。その折、父一禎も姉一家とともに来高、平穏な暮しのなかで1927年、高知で没した。76歳だった。

ながい年月をへて1992年、高知歌人協会が啄木と父一禎を偲んで「石川一禎終焉の地」の木標柱を駅の官舎跡にたてたが、その後高知駅前開発が始つていく。そのなかで木標柱は撤去された。2008年、県内歌人、文化関係者の呼びかけで「啄木・一禎の碑をつくる会」ができた。高橋正高知ペンクラブ会長が代表となり、全国にも発信、募金は300万円をこえた。

啄木は戦前、戦中、戦後を通じて高知でも多くの青年があこがれてきた。このなかから上田庄三郎、小砂丘忠義らの自由主義教育、綴方運動が育つていった。

駅前の歌碑には自筆の次が刻まれた。

よく怒るひとにてありしわが父の
日ごろ怒らず 怒れと思ふ 啄木

啄木は父のうつ積した姿を詠みこんでおり、父一禎は流浪の日々の現実をうたいこんでいた。啄木没後99年目、父一禎は82年目に父子ともに高知という地で碑に刻まれ再会を果たしたこととなつた。もっと多くに知られていい文学碑である。

(詩人)

資料受贈報告 —寄贈資料から—

『たむらちせい全句集』

▼鍵山陽一・大町桂月書軸

▼西澤保彦・兩人變成
两只(いつか、ふたりは二匹) 西澤保彦著 王丹妃訳

阳光出版社刊他 ▼田島征彦・ふしきなどもだち
田島征彦作 くもん出版刊 ▼食野雅子・マジック・
ボーブ・オズボーン著 食野雅子訳 KADOKAWA
刊」▼集英社・戌亥の追風 山本一力著 集英社刊」他

▼ボプラ社・asta 2013年8月号 中脇初枝
「百円玉」収載 吉田元子編 ボプラ社刊」他

▼霸王樹社・霸王樹 第90巻第8号 90周年記念特大
号 佐田毅編 「霸王樹社刊」他 ▼林嗣夫・日常の
裂けめより—〈詩をめぐるノート 林嗣夫著刊」

▼小松弘愛・Reverberations from Fukushima:
50 Japanese poets speak out (福島からの反響音
市) 佐田毅編 「霸王樹社刊」他 ▼林嗣夫・日常の
裂けめより—〈詩をめぐるノート 林嗣夫著刊」

▼アロルディ・麻緒編 Inkwater Press刊」
多賀一造・歌集 ふるさとの山河 多賀一造著 馬酔
木舎刊」▼恒石直和・草木歳時記 天の巻・地の巻
恒石直和著刊」▼宮崎文敬・もへえ修行中 宮崎
文敬著 風兎遙キヤラクター原案 上北ふたご漫画
リープル出版刊」



▼鍵山陽一・中町桂月書軸

▼西澤保彦・兩人變成
两只(いつか、ふたりは二匹) 西澤保彦著 王丹妃訳

阳光出版社刊他 ▼田島征彦・ふしきなどもだち
田島征彦作 くもん出版刊 ▼食野雅子・マジック・
ボーブ・オズボーン著 食野雅子訳 KADOKAWA
刊」▼集英社・戌亥の追風 山本一力著 集英社刊」他

▼ボプラ社・asta 2013年8月号 中脇初枝
「百円玉」収載 吉田元子編 ボプラ社刊」他

▼霸王樹社・霸王樹 第90巻第8号 90周年記念特大
号 佐田毅編 「霸王樹社刊」他 ▼林嗣夫・日常の
裂けめより—〈詩をめぐるノート 林嗣夫著刊」

▼小松弘愛・Reverberations from Fukushima:
50 Japanese poets speak out (福島からの反響音
市) 佐田毅編 「霸王樹社刊」他 ▼林嗣夫・日常の
裂けめより—〈詩をめぐるノート 林嗣夫著刊」

▼アロルディ・麻緒編 Inkwater Press刊」
多賀一造・歌集 ふるさとの山河 多賀一造著 馬酔
木舎刊」▼恒石直和・草木歳時記 天の巻・地の巻
恒石直和著刊」▼宮崎文敬・もへえ修行中 宮崎
文敬著 風兎遙キヤラクター原案 上北ふたご漫画
リープル出版刊」

▼鍵山陽一・中町桂月書軸

▼西澤保彦・兩人變成
两只(いつか、ふたりは二匹) 西澤保彦著 王丹妃訳

阳光出版社刊他 ▼田島征彦・ふしきなどもだち
田島征彦作 くもん出版刊 ▼食野雅子・マジック・
ボーブ・オズボーン著 食野雅子訳 KADOKAWA
刊」▼集英社・戌亥の追風 山本一力著 集英社刊」他

▼ボプラ社・asta 2013年8月号 中脇初枝
「百円玉」収載 吉田元子編 ボプラ社刊」他

▼霸王樹社・霸王樹 第90巻第8号 90周年記念特大
号 佐田毅編 「霸王樹社刊」他 ▼林嗣夫・日常の
裂けめより—〈詩をめぐるノート 林嗣夫著刊」

▼小松弘愛・Reverberations from Fukushima:
50 Japanese poets speak out (福島からの反響音
市) 佐田毅編 「霸王樹社刊」他 ▼林嗣夫・日常の
裂けめより—〈詩をめぐるノート 林嗣夫著刊」

▼アロルディ・麻緒編 Inkwater Press刊」
多賀一造・歌集 ふるさとの山河 多賀一造著 馬酔
木舎刊」▼恒石直和・草木歳時記 天の巻・地の巻
恒石直和著刊」▼宮崎文敬・もへえ修行中 宮崎
文敬著 風兎遙キヤラクター原案 上北ふたご漫画
リープル出版刊」

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。
厚くお礼を申し上げます。

2012(平成24)年、こうしたたむらさんの多年にわたる活動に対し、高知県文化賞が贈られました。

本書『たむらちせい全句集』は、1969(昭和44)年刊行の第一句集『海市』から未刊句集『日日』までの7集を収録。全編を通じ、人や自然を見つめるたむらさんの眼の鋭さ、あたたかさが感じられるとともに、作風の変遷を辿ることができます。

卷末の略年譜に目を通すと、精力的な活動の間に、時折、我が事のように師友の動静が記されていることに気づきます。「ありがとう。今はその一言に尽きる。」今年86歳になられたたむらさんは、本書あとがきをこう結んでいます。

▼鍵山陽一・中町桂月書軸

▼西澤保彦・兩人變成
两只(いつか、ふたりは二匹) 西澤保彦著 王丹妃訳

阳光出版社刊他 ▼田島征彦・ふしきなどもだち
田島征彦作 くもん出版刊 ▼食野雅子・マジック・
ボーブ・オズボーン著 食野雅子訳 KADOKAWA
刊」▼集英社・戌亥の追風 山本一力著 集英社刊」他

▼ボプラ社・asta 2013年8月号 中脇初枝
「百円玉」収載 吉田元子編 ボプラ社刊」他

▼霸王樹社・霸王樹 第90巻第8号 90周年記念特大
号 佐田毅編 「霸王樹社刊」他 ▼林嗣夫・日常の
裂けめより—〈詩をめぐるノート 林嗣夫著刊」

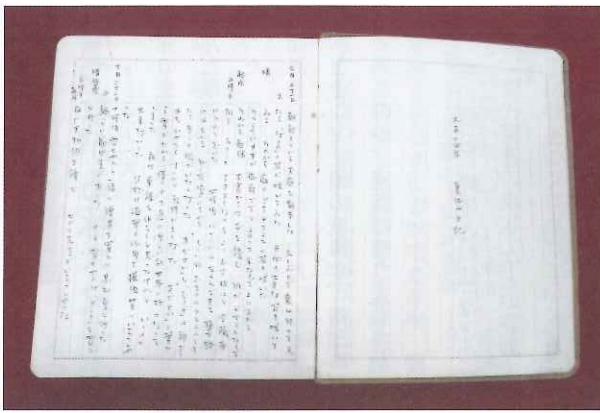
▼小松弘愛・Reverberations from Fukushima:
50 Japanese poets speak out (福島からの反響音
市) 佐田毅編 「霸王樹社刊」他 ▼林嗣夫・日常の
裂けめより—〈詩をめぐるノート 林嗣夫著刊」

▼アロルディ・麻緒編 Inkwater Press刊」
多賀一造・歌集 ふるさとの山河 多賀一造著 馬酔
木舎刊」▼恒石直和・草木歳時記 天の巻・地の巻
恒石直和著刊」▼宮崎文敬・もへえ修行中 宮崎
文敬著 風兎遙キヤラクター原案 上北ふたご漫画
リープル出版刊」

(学芸課／小松路代)

新しい寺田寅彦資料が寄贈されました！

トピックス



▲弥生さんの日記。1冊の日記帳にその日その日の出来事が細やかに綴られている。

高知県立文学館は、物理学者であり、随筆家でもある寺田寅彦の資料に関しては、全国随一のコレクションを誇っています。そしてこのたび、このコレクションに加わる貴重な資料をご寄贈いただきました！

今回ご寄贈いただいた資料は、寺田寅彦の娘・弥生さんの日記です。大正14年から昭和11年までのものを、弥生さんご自身が結婚後間もなくまとめたと考えられます。

この日記には、弥生さんから見た父・寅彦のことや、寅彦の母・亀のお葬式のため、高知へ行った時のことが書かれています。

たとえば、ある日はラッパを買い、子猫の写真を撮り、

屋形船に乗って調査をし、またある日は軽井沢へ家族旅行する寅彦の日常が記されています。大正末から昭和初期にかけては、寅彦が精力的に研究を行っていた時期でもありますので、その当時の寅彦が興味を持つていたこと

と照らし合わせながら日記を見ていくと、非常に興味深いものです。

また、高知行きのくだけでは、親戚の伊野部家、別役家の人々の様子のほか、高知の日曜市や桂浜、仁淀川、大杉村の大杉などのことが書かれており、高知県の記録として見ても貴重と言えるでしょう。

何より、書き始められた当時13歳だった弥生さんの瑞々しい感性や少女らしい振る舞いが、とても魅力的です。

たとえば日記の第一日目は、このように書かれています。「朝起きてからお庭を散歩した（略）夜は童謡を作らうかと思ったけれど、いゝのが出来なかつた」……当時の少女たちの、本当に愛らしい姿を見ることができます。

ご寄贈いただいた資料は、機会を作り、皆さんに見て頂きたいと考えています。時期は未定ですが、楽しみに待ちください！

（学芸課／永橋禎子）

実験コーナー(寺田寅彦記念室)が変わりました！

気軽に寅彦の実験を体験できると好評の、寺田寅彦記念室にある実験コーナーを、椿の実験から共鳴の実験に入れ替えしました。このコーナーでは、音叉をたたいて、止めるとき、なぜかとなりの音叉から音が聞こえてくる、「共鳴」という現象を体験できます。

寅彦は、波、地震など、振動に関する研究を多く行っていました。音もまた、こうした研究の一環であったと考えられます。

実験とあわせて、音楽の大好きだった寅彦のエッセイもパネルで紹介していますので、みなさま、ぜひ寺田室へお越しください！



「万葉集・こころの旅展」に思う

元吉 喜志男

「籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち…」素朴でおおらかなリズム、雄略天皇のこの巻頭歌ではじまる『万葉集』。1300年の時空を越え、4500余首にも及ぶ身分を越えた万葉びとの喜怒哀樂や季節を愛でる気持ち。

「万葉集・こころの旅展」大和路を愛した入江泰吉の作品とともに（12月5日～）に思いを巡らせてはいる。高校時代に学んだ程度の知識を手がかりにと言えば、専門に研究されている方々からは「恐れを知らぬわたる所業」と眉をひそめられそうな気もする。土佐と『万葉集』の関係と言えば、江戸時代の国学者・歌人の鹿持雅澄や土佐国に配流された上乙麻呂の歌などを想起されるかも知れない。

しかし、高知で企画展をと思った背景は、文語調の古語などで敬遠されがちな『万葉集』をもっと多くの人に身近に感じていただけたらとの思いによるものである。高知県出身で高岡市万葉歴史館の館長をされている坂本信幸先生（奈良女子大学名誉教授）との出会い。そして、大津皇子の悲劇を孕む二上山を撮るために瞬のシャッターチャンスを求めて何日も日参したり、約半世紀にわたって奈良大和路・万葉の風景を撮影してきた写真家・入江泰吉氏の作品に深い感銘を受けたことなどに端を発している。

スマホ・ケータイなど文明の利器を介しデジタル全盛の時代ではある。天武天皇の「わが里に 大雪降れり…」の歌に対し、藤原夫人の「わが岡の 露に言ひて…」という絶妙な返し、言葉のキャッチボールに触れるなかで思い出しがある。ある時、あるヒトから「潮の満つ いつもの浦の入った書簡。その時は『枕草子』の中でも引用された古歌とは即座に気づかず、それに応えての返歌『きみの待つ潮満つ浦へ 乗り出でん 思ふ心に 波たでけり』。平成の今世でも、時間の間という情緒も愉しみながら、こうした思いや会話の一こまがあつても悪くはない。

館長室から

中脇初枝展、ついにオープンです！



中脇さんは、県立中村高校在学中に「魚のように」で第2回坊っちゃん文学賞を受賞、鮮烈な作家デビューを飾りました。やわらかく温かな筆致で描かれた作品は多くの方に愛され、最近は児童虐待をテーマとした『きみはいい子』(2012年 ポプラ社)が坪田譲治文学賞を受賞、さらに映画化が決定しました。この映画は高良健吾さんや尾野真千子さんなど実力のある俳優さんが出演し、第38回モントリオール世界映画祭ワールドコンペティション部門最優秀監督賞を受賞した吳美保さんが監督されるなど、大きな注目を集めています。

この展覧会は、そんな中脇さんの素敵なお仕事と紹介するものです。展示では、中脇さんの感性を育んだふるさと中村(幡多地域)、中脇さんのこれまでの足跡、さらにその作品について「絵本」「昔話」「小説」の三つの分野にわけて紹介しています。



▲展示室の様子



▲展示解説は毎週土曜日午後1時半より行っています。

中脇初枝展～ちやあちゃんの里帰り～

好評開催中!! 11月3日(月・祝)まで

会期中無休

観覧料:500円(常設展含む) 高校生以下無料

中脇さんの作品の持つ深みや魅力、そしてそんな中脇さんを生んだ高知の風土の素晴らしさを再発見できる展覧会です。ぜひご来館ください！皆さまのお越しを、心よりお待ちしております。

(学芸課／永橋禎子)

中脇さんの言葉や小さい頃の絵日記、高校時代の作文などからは、中脇さんの温かいお人柄や地元・中村に対する深い愛着を感じ取ることができます。また、絵本や昔話のコーナーでは、幡多地域で語られている昔話の紹介(高知県の幡多地域には、岩手県の遠野に並ぶくらい、たくさんの昔話が残されているそうです)に加え、絵本画家の酒井駒子さん、田島征三さん、鎌田歩さん、布川愛子さん、ささめやゆきさんによる大変美しい原画が展示されており、物語と共に楽しめるようになっています。坊っちゃん文学賞受賞時のトロフィーや執筆メモなど、小説に関する貴重な資料や、最新作の情報も見逃せません。お話を紹介や本を読めるコーナーもありますので、中脇さんを知らない人でも、展示を見終わったらきっと中脇

「」来館くださったお客様は、美しい原画に見入り、昔話の語りをお聞きになるなど、ゆっくりとくつろいでお過ごしになります。中脇さんの昔話の語りも非常に好評です！

他にも、中脇さんが文学館で行う記念対談とサイン会をはじめ、中村を回る文学散歩、親子で楽しめる野外コンサートなど、イベントも盛りだくさんです！イベントはまだまだ間に合いますので、「」ちらもお気軽にご参加ください。

作品になっているでしょう。さらに、触れて楽しむコーナーや「中脇さんご自身による昔話の語りをCDで聞けるコーナーもあり、小さなお子さんから高齢の方まで、誰でも楽しめるような内容になっています。また、ショップでも楽しめるような内容になっています。また、ショップ地域のお土産も買えるようになっていますので、要チェックです。

企画展 案内

中脇初枝展～ちやあちゃんの里帰り～

9月19日(金)～11月3日(月・祝) 場所：企画展示室 観覧料：500円

中脇初枝さんは、県立中村高等学校在学中、「魚のように」で坊ちゃん文学賞を受賞、17歳で作家デビューしました。『祈祷師の娘』『きみはいい子』など、温かい筆致で描かれた作品世界は多くの人々に愛されています。本展覧会では、純文学、昔話、児童文学と、さまざまなジャンルで展開されている中脇作品世界の魅力をご紹介します。

中脇初枝展のご案内をしています！ 詳細は7ページをご覧ください。



撮影／根津千尋

万葉集・こころの旅展～大和路を愛した入江泰吉の作品とともに～

12月5日(金)～平成27年2月8日(日) 場所：企画展示室 観覧料：500円

わが国最古の『万葉集』の歌には、いにしえの人々の喜怒哀楽のさまがまっすぐに表現され、私たちの心に根付く日本の原風景を呼び起こしてくれます。大和路特有の美や情趣をライフワークとして撮り続けた入江泰吉氏の写真を通して、大和路に漂う余情や空気感に思いを馳せていただきます。

(※12月27日～1月1日は年末年始のため休館となります)

展覧会の紹介をしています！ 詳細は表紙・2・3ページをご覧ください。



陽春大仏殿

計画進行中！お楽しみに

北欧文学との出会い展

平成27年 2月21日(土)～4月19日(日) 場所：企画展示室 観覧料：500円

第17回 児童生徒文学作品朗読コンクール

当館では、朗読を通して文学に親しむ子どもたちを育てたいと願い、毎年、朗読コンクールを開催しています。子どもたちが一生懸命練習した朗読を聞きに、ぜひ、会場へお越しください。

◆県審査（公開）表彰式・記念講演会があります。

会場：高知県立文学館ホール

日時：11月2日(日)午後1時～

地区審査で選出された児童生徒の公開審査および表彰式・記念講演会を開催します。

入場
無料

特別審査員・村岡恵理先生による記念講演会開催！

「アンのゆりかご
村岡花子の生涯」

◆講演会のあと、サイン会も実施予定です！
(サイン会対象本はミュージアムショップにて販売中！)



※館内メンテナンスのため、11月8日(土)～11月21日(金)まで臨時休館

いたします。11月22日(土)より通常開館いたします。

※また、年末年始のため、12月27日(土)～1月1日(木)は休館いたします。

新年は1月2日(金)より開館いたします。



利用案内

開館時間 午前9時～午後5時（入館は、午後4時半まで）

休館日 年末年始（12月27日～1月1日）を除き、無休。

※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。

一般360円 企画展はそれぞれ異なります。

20人以上の団体は2割引。高校生以下無料、

高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、

精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者

健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。

駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、子どものぶんがく室、茶室「慶雲庵」

貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

E-mail : bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp

<http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/>

交通のご案内



- 高知駅より空港連絡バス（県庁前行）
「公園通り」下車 北へ徒歩5分
- JR高知駅下車徒歩20分（またはバス・路面電車を利用）
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立
文学館

〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857